支笏洞爺国立公園
支笏湖園地

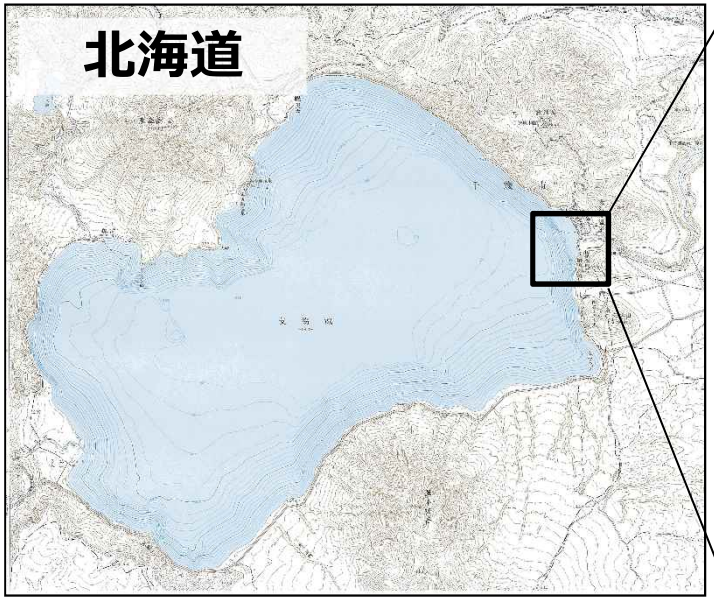
変更

区域面積：11.95ha→14.6ha

執行者（予定者）：環境省、千歳市

第２種特別地域（支笏湖集団施設地区、環境省所管地）

●位置図



●公園計画図

○支笏湖地区は支笏湖ビジターセンターにおいて年間約26.8万人（令和元年度）の利用があり、モラップ地区はモラップ野営場において年間約2.3万人（令和元年度）の利用があるなど、支笏洞爺国立公園における利用の中心地である。

変更後
変更前（現行区域）

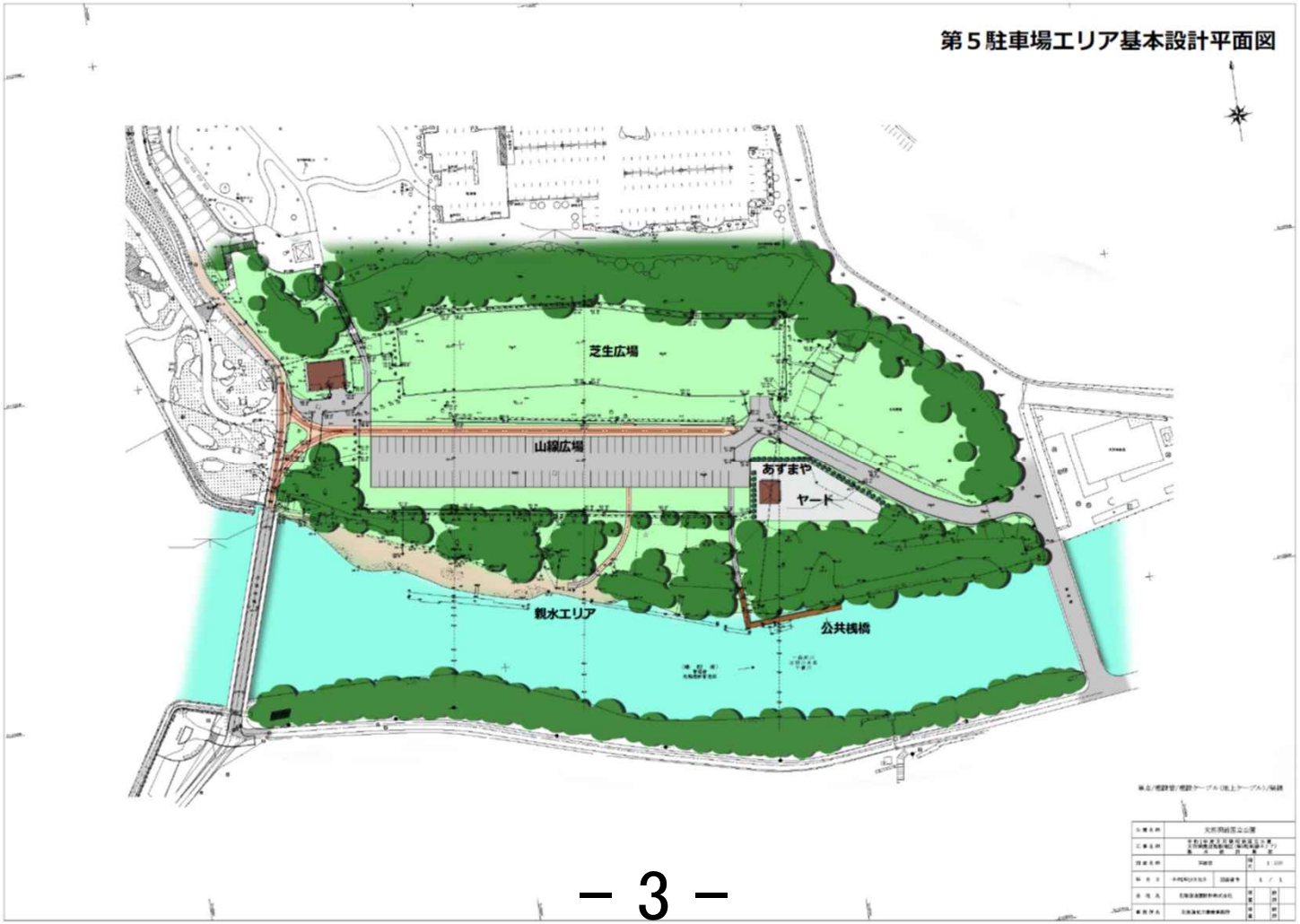
事業規模

区域面積：11.95ha→14.6ha

○一部既に園地として利用されてきた範囲の把握と、支笏湖集団施設地区第５駐車場および千歳川河川敷周辺の利用方法検討のため宿舎事業から振替。

第５駐車場および千歳川河川敷エリアの再整備

- 千歳川河川敷からの水上アクティビティ利用の増加等、公園利用形態の変化を受け、第５駐車場および千歳川河川敷周辺の利用方法の検討を行っている。
- 支笏湖地域の関係者で作成する、水面利用の「地域ルール」と連携した整備を進めている。



支笏洞爺国立公園　　支笏湖園地【変更】

自然環境への影響

本事業地は、過利用による土壌の踏み固めや、植生の消失、水草の衰退や小型動物の過剰採取などの問題が発生している。整備に伴いゾーニングを行うことで、無秩序な利用が抑制され、自然環境保全に繋がることが期待されている。

親水エリアの安全対策

土砂災害警戒区域から外れているとともに、支笏湖の下流に水力発電ダムであることから、ある程度水量が安定している。また、地元団体等による地域ルールの策定とそれを踏まえた地域全体での注意喚起や普及啓発も想定されている。

秩父多摩甲斐国立公園
青梅塩山線道路（車道）変更

路線距離：60km→変更なし

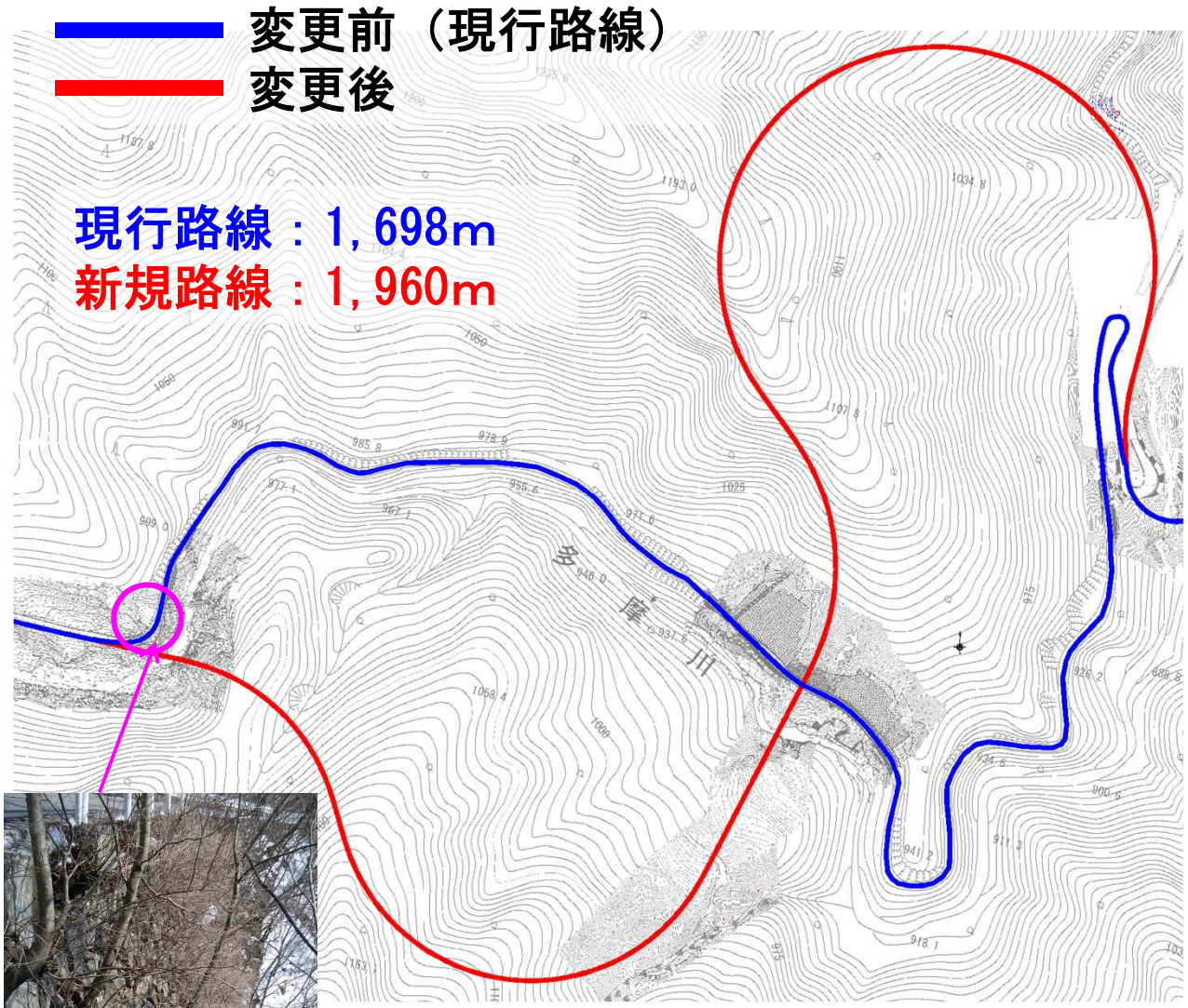
執行者（予定者）：山梨県

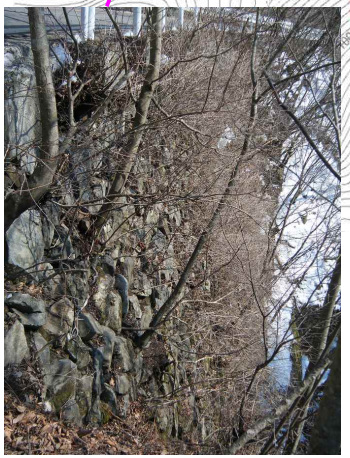
第１、２種特別地域（県有地、東京都有地）

○一般国道411号線の一部区間であり、東京都青梅市と山梨県甲州市を結ぶ唯一の連絡道。大規模な地震等の災害発生時においては国道20号の代替道路に指定されている重要道路である。

○地域住民の生活道路であるほか、奥多摩湖や奥多摩の諸渓谷沿いを通り、雲取山、笠取山、鶏冠山、大菩薩嶺等の登山口へと続く道路に連結しており、公園利用者の通行も多い。

○自動車交通量は1,181台/日（平成27年度道路交通調査）





石積みの風化が進んでいる箇所。
目地は空隙が多く、緩みを伴う部分がある。

【変更箇所】

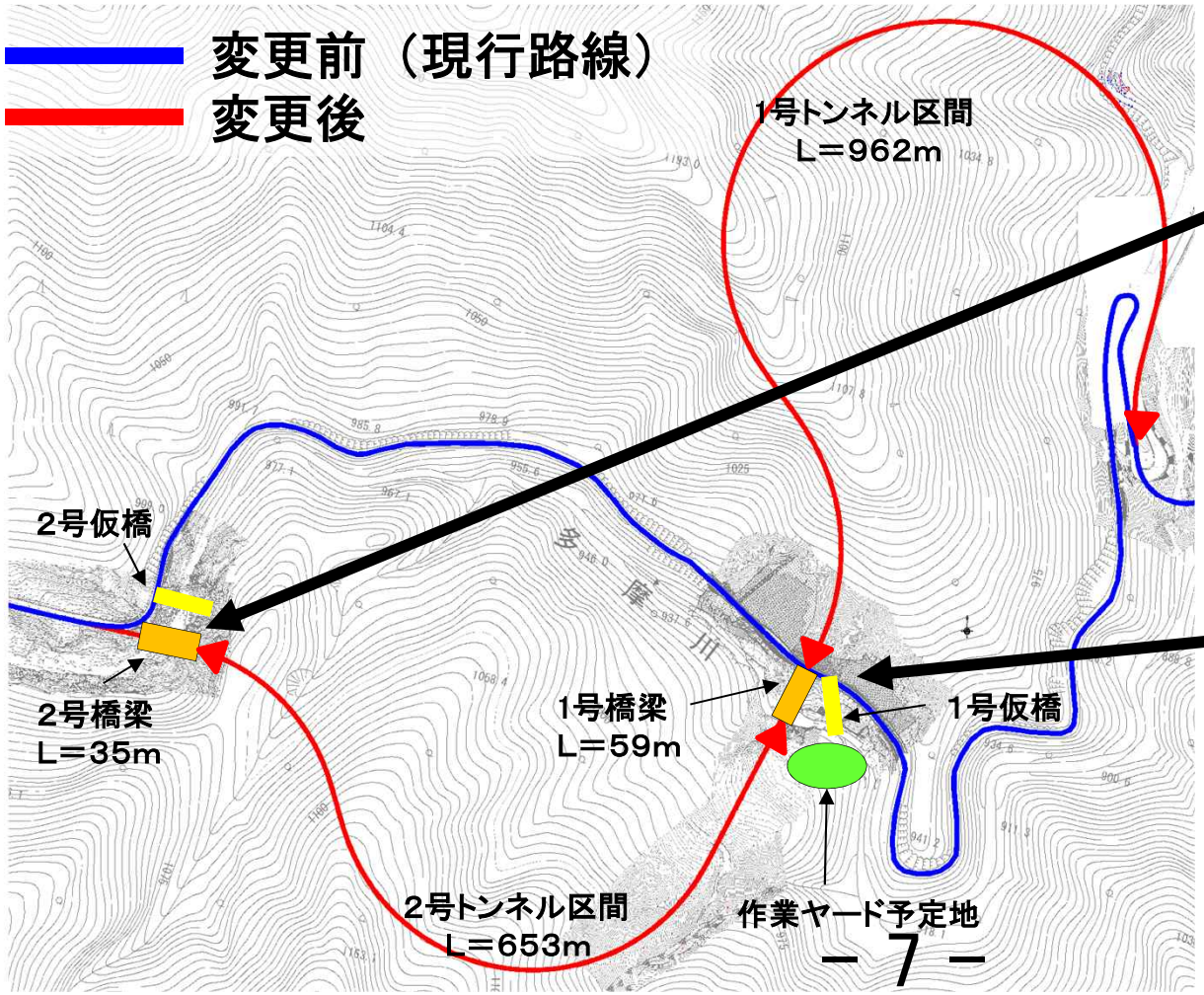
- 幅員が狭小で、かつ急勾配　区間も多く存在
- 山側は急峻な地形で法面も長く、露岩、浮石が多く非常に危険
- 冬季の積雪・凍結に対する安全の確保も必要

道路拡幅改良では危険個所を排除できないこと、周辺環境への影響を最大限抑えるため、
<u>トンネル・橋梁によるバイパス化</u>を実施

事業規模
路線距離：60km⇒変更なし

バイパス化のためのトンネル・橋梁整備

- 落石等の危険があり、屈曲区間が続く区間において、執行者である山梨県にてトンネル・橋梁によるバイパス化を行う
- 旧道（現行路線）は、既存施設を撤去し、森林回復を図る予定（関係機関協議中）



自然環境への影響

○道路線形は極力地形に順応させ必要最短距離となっている。
　また、トンネル坑口部周辺の改変面積は必要最小限に抑えられている。
○支障木として道路新設・仮設ヤード区間を含めケヤキ・ナラ等の樹木が
　約1,200本伐採されることが想定されるが、必要最小限。
　また、これらの樹種には特に保護の必要な希少種等は確認されていない。
○工事で発生する法面は、周辺の森林から飛来した種子により、緑化する予定。
○トンネル工事等による土砂は、国立公園区域外及び普通地域に搬出。
○擁壁等の構造物及び橋梁の色彩は周辺の景観になじむ色とする。

●渓谷斜面や周辺の山岳地には、イヌワシやクマタカなど希少猛禽類の生息の可能性がある
●秩父多摩甲斐国立公園の指定植物であるハナネコノメやミヤマスミレの分布、山地林内には山梨県レッドデータブックで絶滅危惧種となっているオオバボダイジュ等の分布記録がある

山梨県猛禽類研究会や山梨県レッドデータブック作成委員会へのヒアリング及び指導を受けることで、自然環境保全に留意した工事の検討・実施を行う

富士箱根伊豆国立公園
須走口新五合目園地

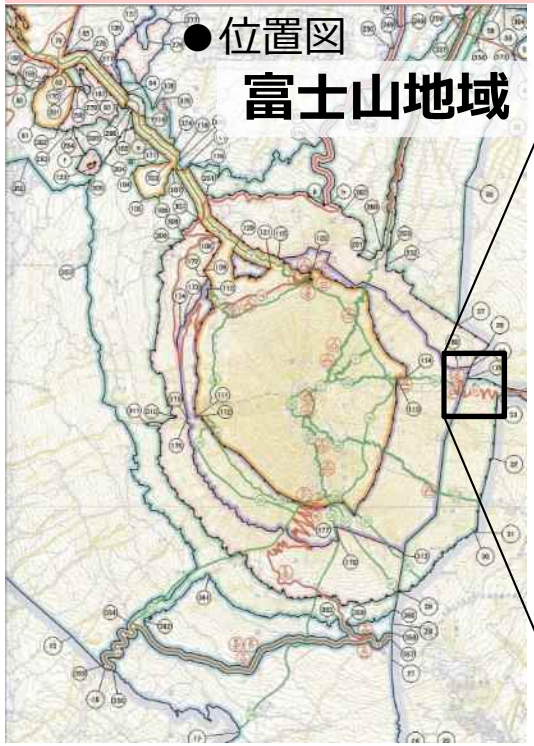
決定

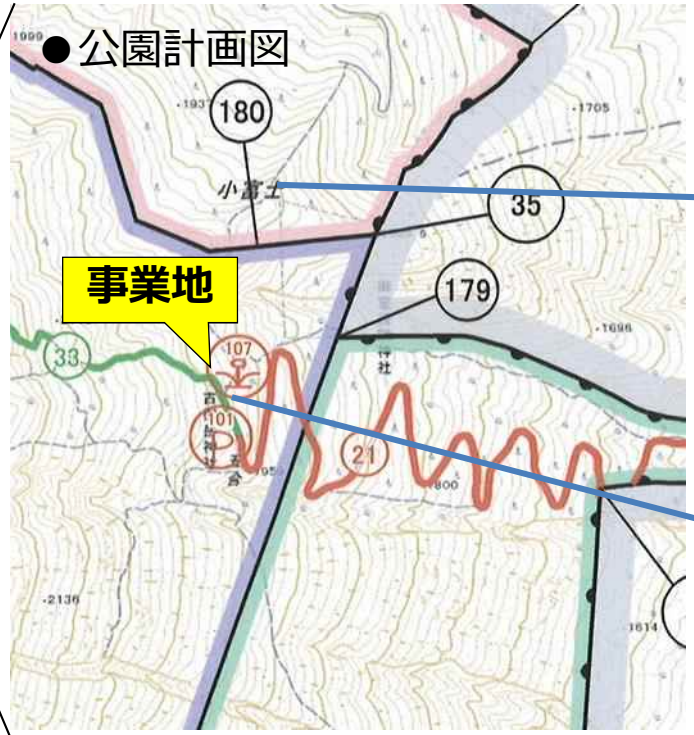
区域面積：0.1ha

執行者（予定者）：

環境省、小山町、民間事業者

第１種特別地域（国有林）

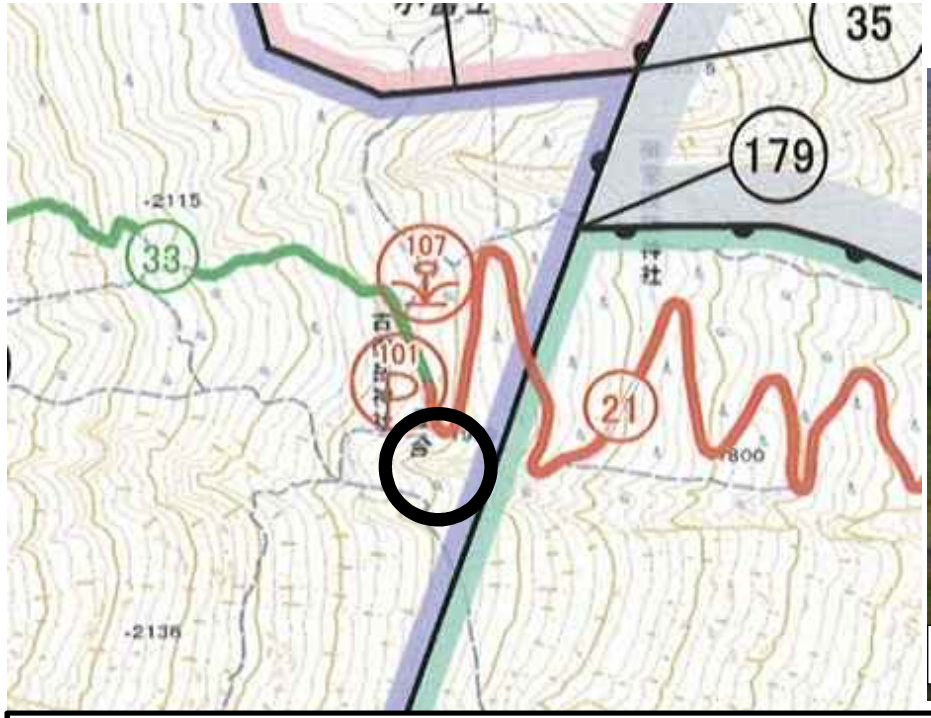




○ 富士山の東斜面中腹に位置し、須走口登山道の起点であり、アクセスルートである「ふじあざみライン」（県道）の終点。

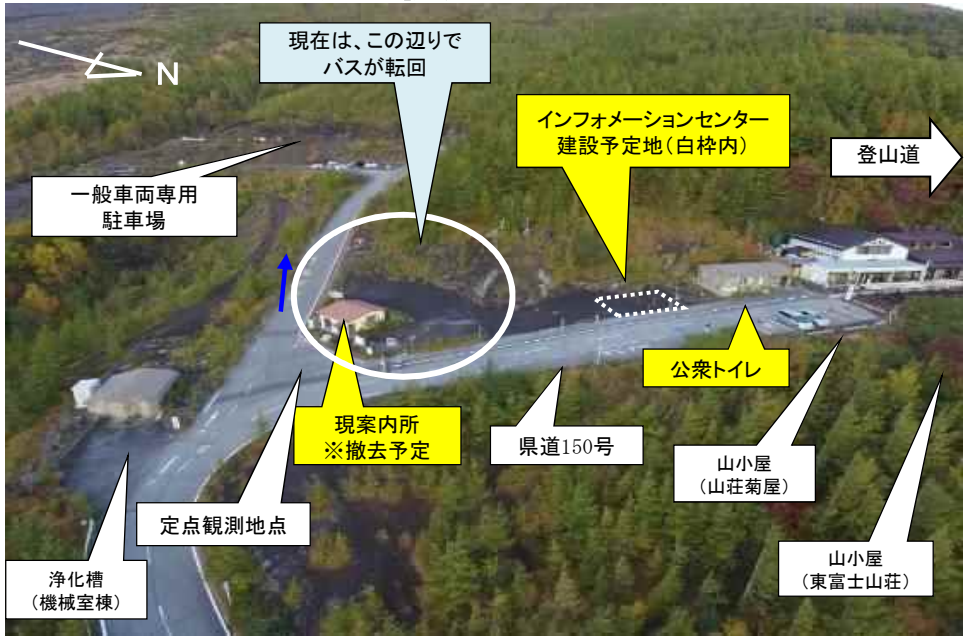
○ 富士登山をはじめ、小富士など周辺の自然散策としても利用が盛ん。

須走口新五合目園地決定区域図



事業規模

区域面積：0.1ha



○ 弾丸登山等、安全上問題のある登山を行う登山者が後を絶たない状況であることから、登山者が登山前に安全に関する情報を入手し学ぶことができる**情報発信機能**が必要。

○ 特定登山道に発生する著しい混雑を緩和させるための登山ルートの利用分散化が必要
→園地整備により、比較的登山者数が少ない須走口五合目の**魅力を向上させ利用分散化**を図る。

○ 特に吉田ルートからの下山時に誤って須走口新五合目へ下山してしまうケースが多く、**下山後の案内対応機能の強化**が必要。

○ 既存のバス転回場は、スムーズな転回が困難であり、登山者の動線と近接していることから、**登山者の安全性向上**のために再整備が必要。

インフォメーションセンターの整備

執行者：環境省
（管理：小山町）

・既存の観光案内所、バスチケット売場、臨時派出所を集約し、整備する。

既存公衆トイレの編入

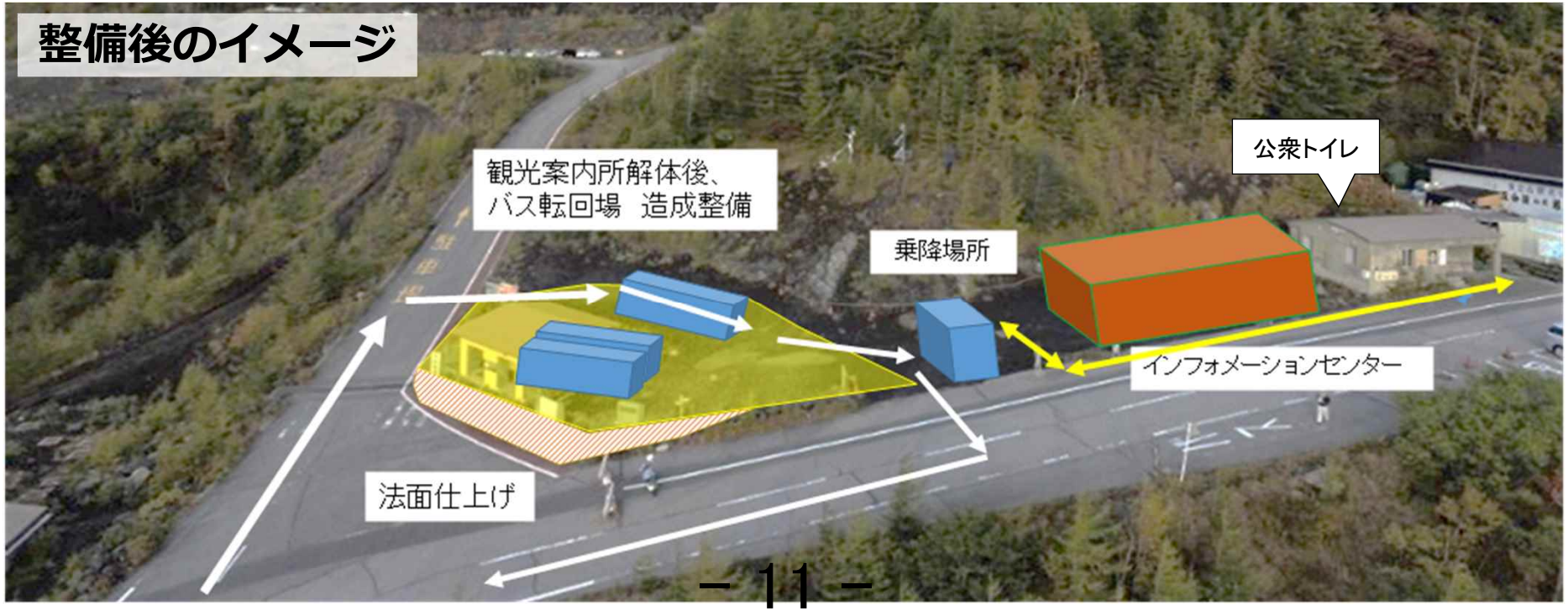
執行者：小山町

・駐車場事業の付帯施設となっている公衆トイレを園地事業に振り替える。

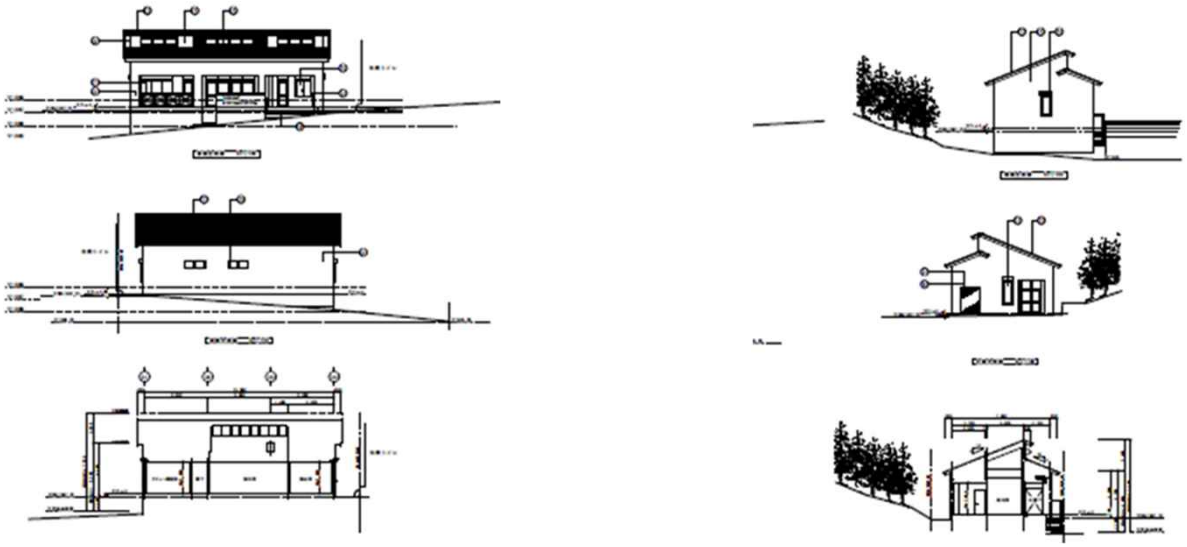
バス転回場の再整備

執行者：民間事業者

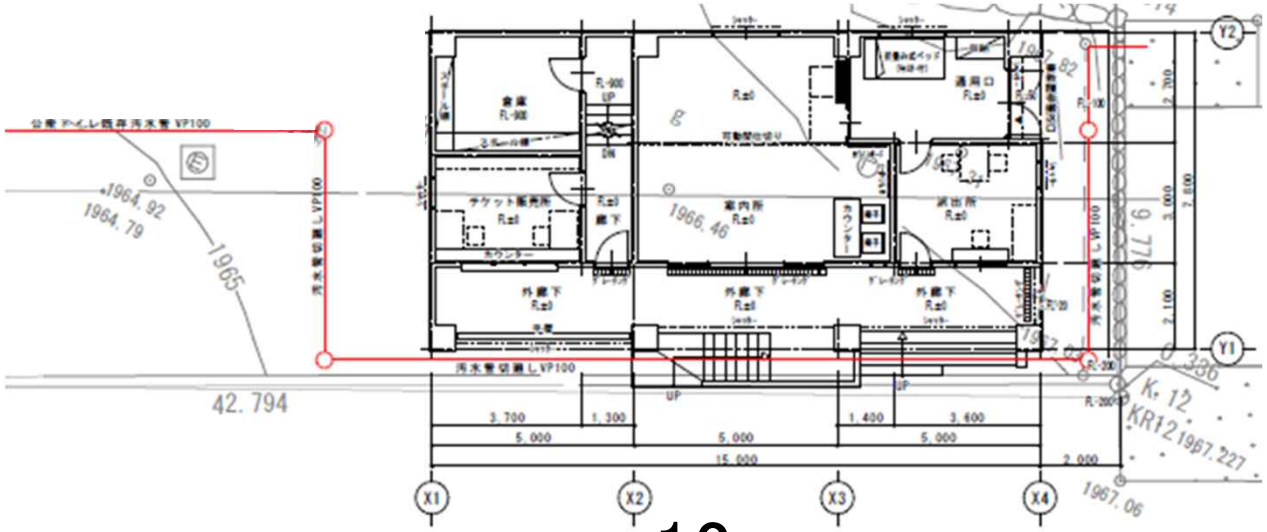
・スムーズな転回と登山者の安全性向上のため、既存施設の再整備を行う。



インフォメーションセンター（立面図）　※令和3年1月時点案　変更の可能性あり



インフォメーションセンター（平面図）　※令和3年1月時点案　変更の可能性あり



自然環境への影響

○ 既存トイレ・山小屋との調和や登山道へのアプローチに配慮した計画とし、屋根の形式や勾配、色彩等について配慮。

○ 既設の観光案内所・臨時派出所・バスチケット売場を集約し、登山口の一体的な景観保全が図られる。

○ 園地付近の眺望地点から富士山頂方向を見た際に、整備対象物は視認できない。

○ 整備予定地には火山砂礫がみられ樹木や草本類の自生は少なく、さらに、木の伐採や草本類の除去は可能な限り避けるよう配慮。

○ 土地の造成を行う際には、建設に伴い発生する残土を最大限利用するなど、富士山にある土砂の利用に努め、やむを得ず外部の土砂を利用する場合は、公園外からの種子混入が無いように外来種対策に十分配慮。

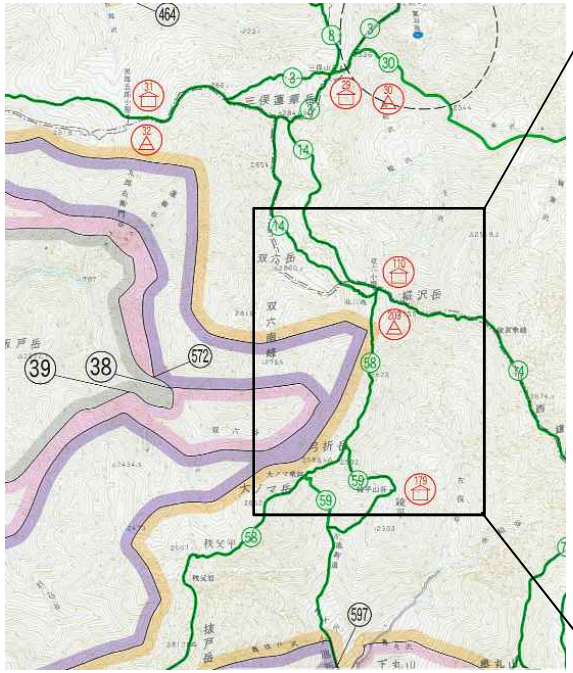
中部山岳国立公園
双六池宿舎

変更

区域面積：0.2ha→0.25ha
最大宿泊者数：150人/日
執行者（予定者）：民間

特別保護地区（国有林）

●位置図



●公園計画図

- 双六池宿舎は標高2,860mの双六岳の直下に位置し、ハイマツの木々に囲まれ、周辺には双六池や双六池野営場がある。
- 北アルプスへの登山ルートにあり、槍・穂高連峰から笠ヶ岳・双六岳のほか奥黒部方面へと向かうメインルートであり利用者も非常に多い。

双六池宿舎変更位置図

事業規模

区域面積：0.2ha→0.25ha

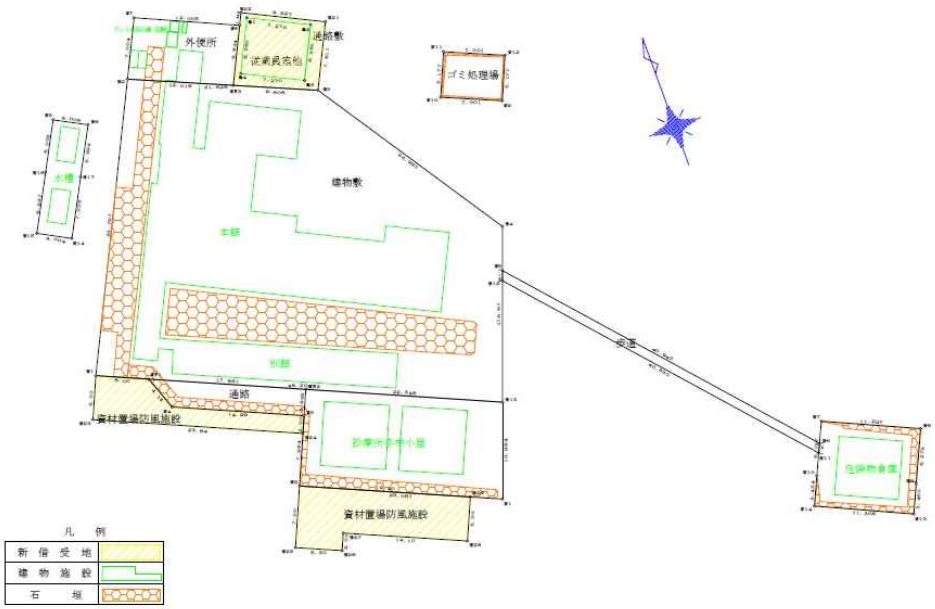
最大宿泊者数：150人/日

- 近年のコロナ禍において従業員の安全を確保して利用者の快適な利用を行うため、従業員寮を新築し、また、暴風対策として石垣を整備する予定である。
- 従業員寮を新築し、石垣の整備をするため事業敷地の拡張が必要。

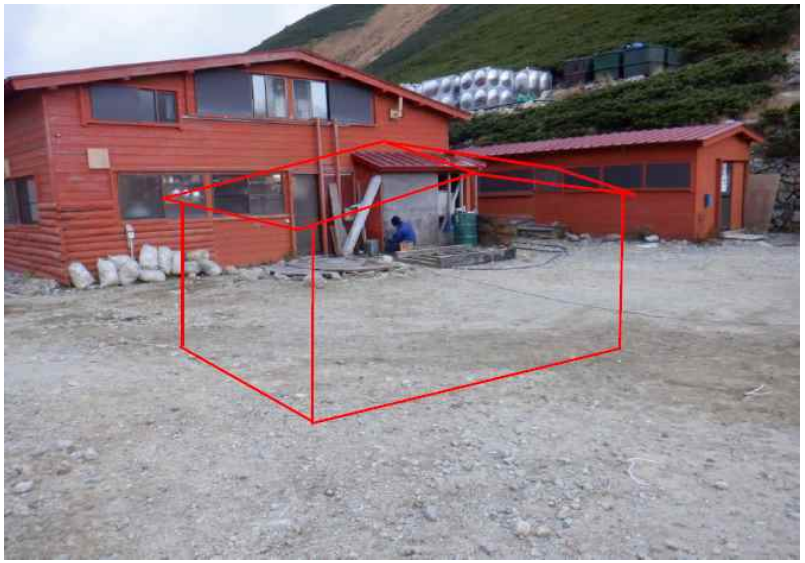
従業員寮の新築と石垣の整備

執行者：民間

- 宿舎の北側に従業員寮を新築。暴風対策として石垣を整備する計画。



黄斜線 新築予定箇所



従業員寮新築予定地

自然環境への影響

- 従業員寮の新築と石垣の整備の改変は必要最小限のものである。

風致景観上の支障

＜現状＞

＜イメージ＞

風致景観上の支障

同系色かつ母屋より低いものを、既存建築物付近に設置する予定のため新たな風致景観上の支障は少ない

＜現状＞

＜イメージ＞

風致景観上の支障

自然素材（石垣）を使用することで、周辺自然景観と調和するようにする予定のため、新たな風致景観上の支障は少ない

奄美群島国立公園
住用博物展示施設

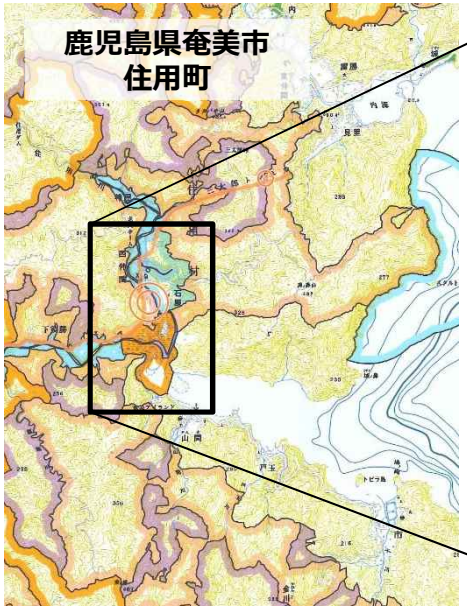
決定

区域面積： 0.2ha

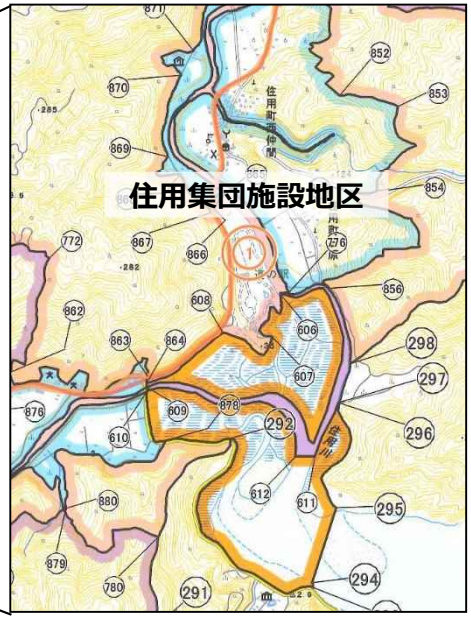
執行者：環境省（予定）

第2種特別地域（公有地（奄美市））

●位置図



●公園計画図



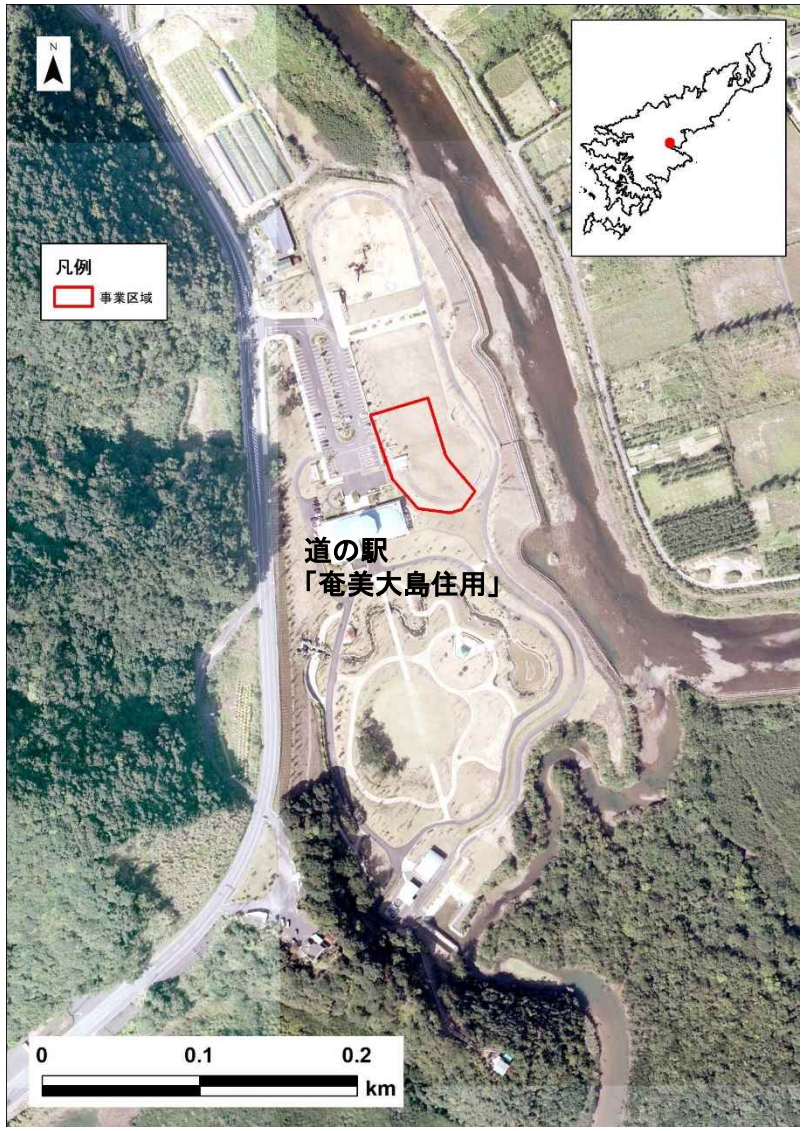
国内最大規模の
住用マングローブ

マングローブのカヌーツアー

- 奄美市が整備した道の駅「奄美大島住用」の敷地内である。道の駅の利用者数は、年間39千人（H30年度）であり、来年7月に世界自然遺産への登録決定後には、さらなる利用者の増加が想定されている。
- 隣接して、国内最大級のマングローブ群落である住用マングローブがあり、カヌーを使って風景探勝をするツアーが数多く企画されている。

住用博物展示施設　決定区域図

事業規模　区域面積：0.2ha



住用博物展示施設
- 整備予定地は、道の駅の敷地内で、芝生広場となっている。

道の駅「奄美大島住用」
- 奄美市が整備。道の駅の中には、レストラン、売店、展示施設、シアター等がある。屋外には、グラウンドゴルフ場、カヌー発着場、展望台、リュウキュウアユ飼育施設が整備されている。

展示企画のポイント　　コンセプト

世界自然遺産・奄美大島の顕著で普遍的な価値への理解・共感を広げ、未来へ継承する一助となるビジターセンターを整備します。

課題		方針
マス観光のゲストは原生林などへの立ち入りが難しく、奄美大島の濃密な自然の魅力に触れる機会が少ない。	→	濃密な生きものの気配に触れるフィールドの感動・興奮を再現
奄美大島独自の自然・生きものに対して、理解・共感、親しみや関心を持ってもらいたい。	→	価値の素晴らしさに気づかせる“生きもの愛”に満ちた展示
人類共通のかけがえのない財産である世界自然遺産・奄美大島の保全や継承への理解を促したい。	→	奄美大島の自然と人の関わりをより良いあり方へ導く場所

企画・設計のキーワード

エデュテインメント
ワクワク楽しみながら
自然と価値の理解や共感につながる

ユニークネス
奄美大島だけにしかない価値を伝える
他にはない展示コミュニケーション

生きものの気配
奄美大島ならではの濃密な生きものの気配を
擬似的に体感できる

多視点・多角的
多くの人に生きものの魅力に気づかせる
専門家や研究者の生きものへの眼差しを取り入れる

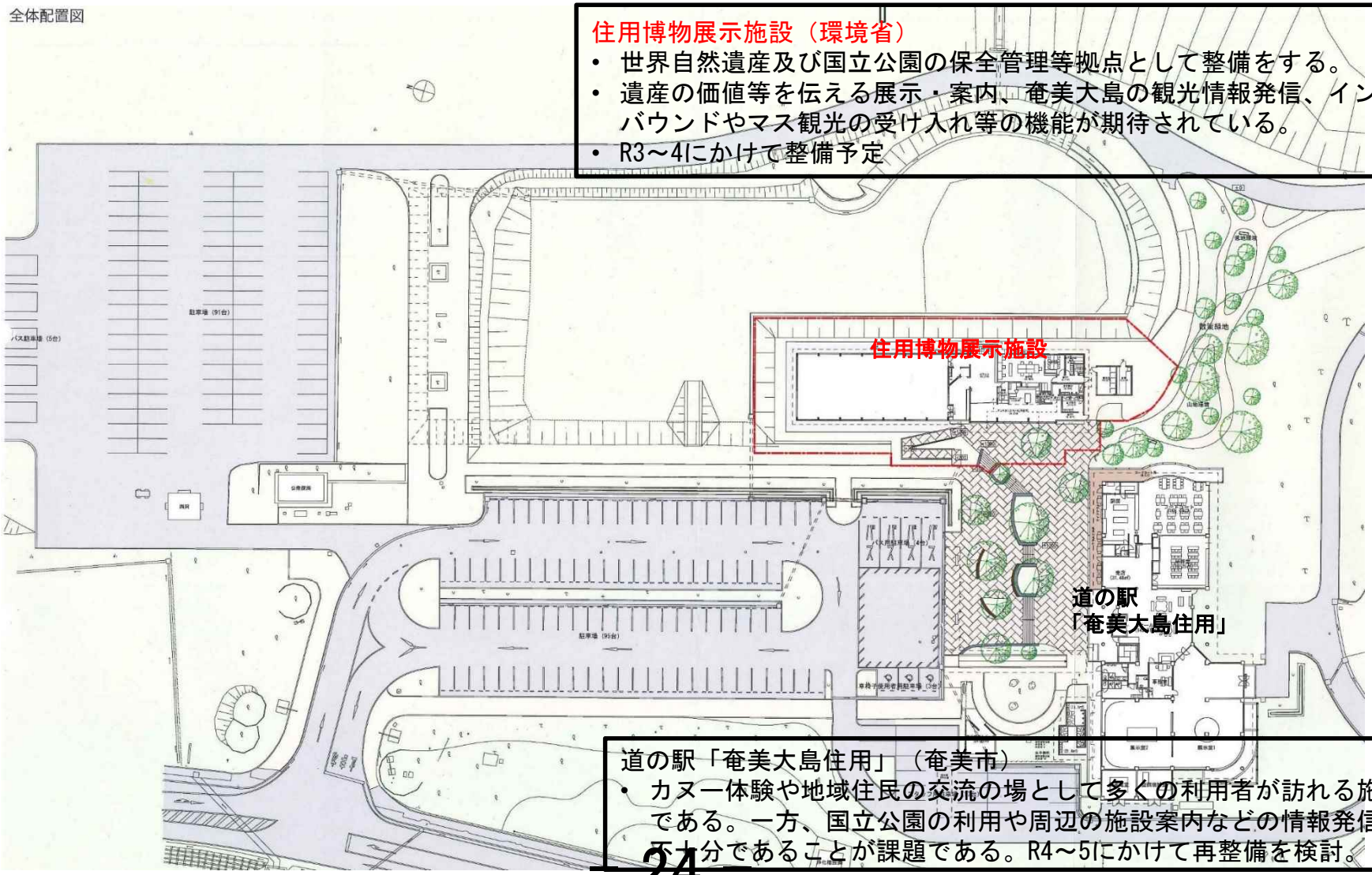
時間の旅
「時の経過」を直感的に感じさせる展示演出で
奄美大島の価値や魅力を浮かび上がらせる

アクティブ
保護活動の状況、研究の成果、
ビジターへの呼びかけなど状況に合わせた発信を行う

1

世界自然遺産及び国立公園の保全管理等拠点施設の整備

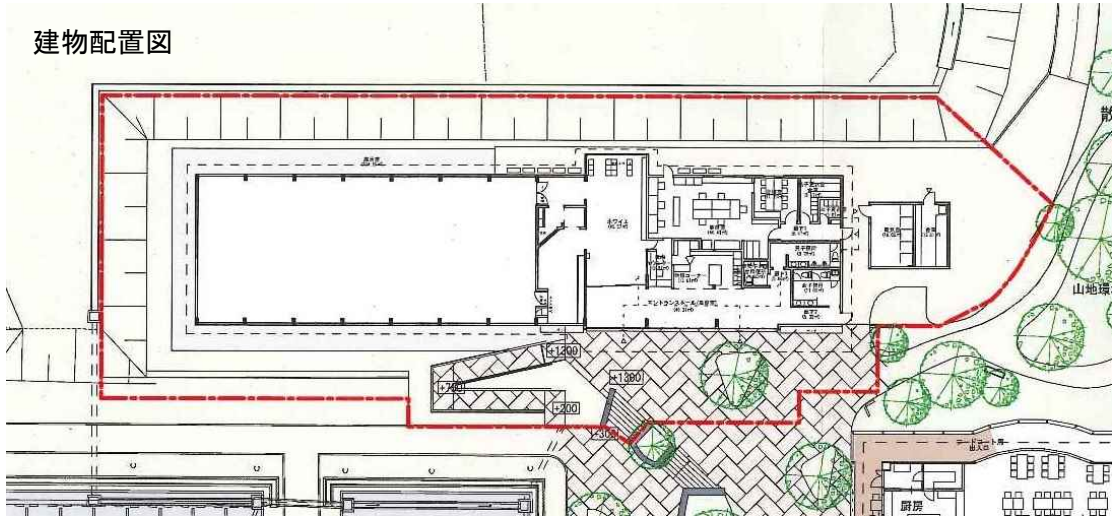
執行者（予定者）：環境省



住用博物展示施設（環境省）
- 世界自然遺産及び国立公園の保全管理等拠点として整備をする。
- 遺産の価値等を伝える展示・案内、奄美大島の観光情報発信、インバウンドやマス観光の受け入れ等の機能が期待されている。
- R3～4にかけて整備予定

道の駅「奄美大島住用」（奄美市）
- カヌー体験や地域住民の交流の場として多くの利用者が訪れる施設である。一方、国立公園の利用や周辺の施設案内などの情報発信が不十分であることが課題である。R4～5にかけて再整備を検討。

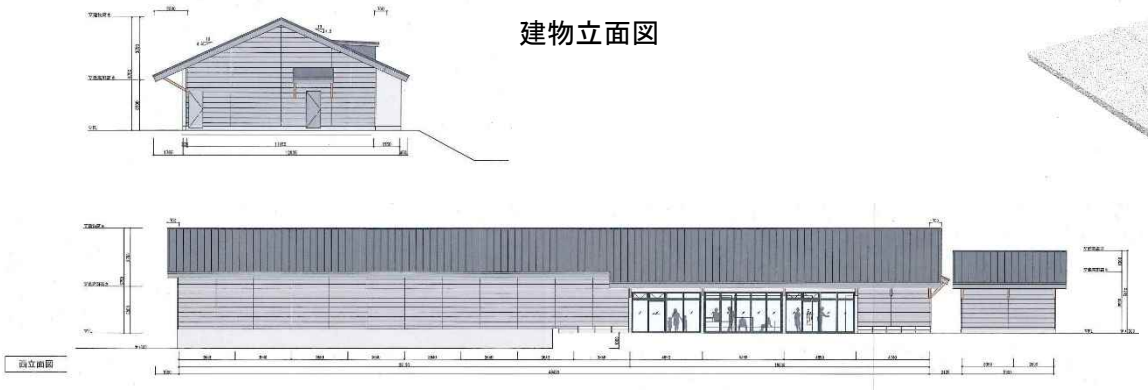
建物配置図



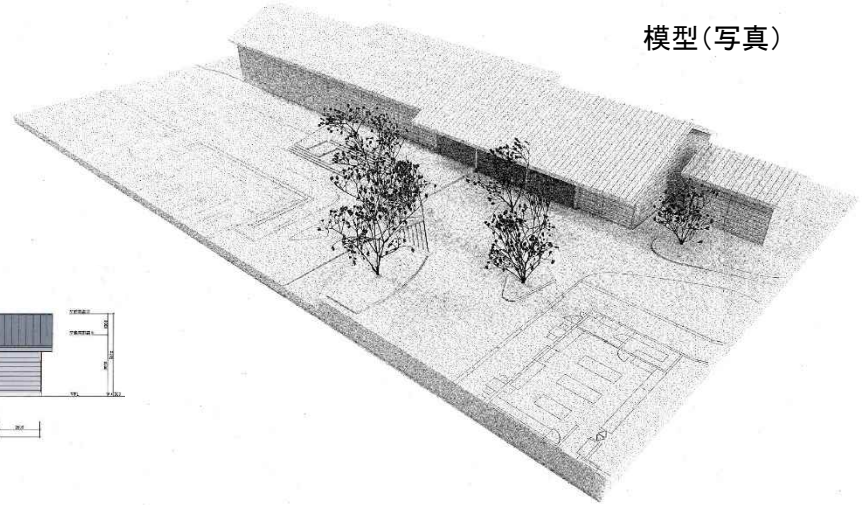
規模及び構造

- 建築面積　約600㎡
- 木造平屋建て、切妻屋根
- 事務室、展示室、トイレ、売店、付属倉庫
- 意匠は、黒・灰色を基調とした色彩

建物立面図



模型（写真）



自然環境への影響

- 今回施設を整備する場所は、芝生の広場となっている改変地である。建物は、周囲の風致景観との調和に留意する。

道の駅との機能分担

コンテンツの企画

隣接する道の駅と展示情報・体験機能を住み分け、
相互利用を促すことでより深い理解と共感につなげます。

世界遺産自然センター

展示方針

自然環境と生態系が持つ価値を理解・共感してもらう展示

世界自然遺産としてのかけがえのない価値が生み出された背景や
固有種をはじめとしたここにしかない生態系の魅力を紹介する。

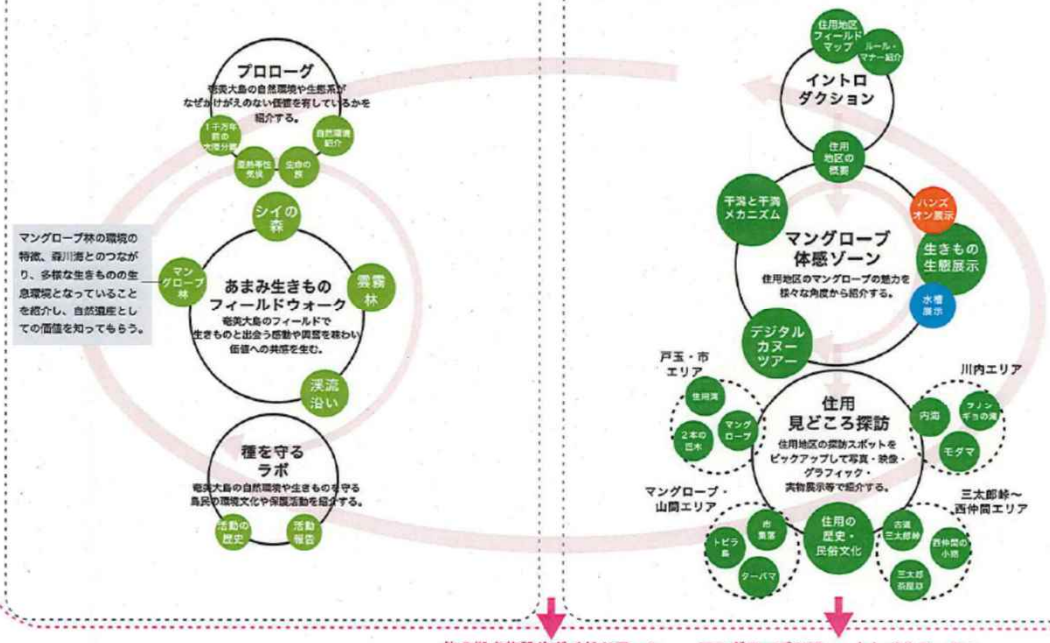
道の駅マングローブ館

展示方針

住用のフィールドへ誘う生態・ハンズオン型の展示

地域内（主に住用町）の自然・歴史・文化等の魅力を
現地と結びつく形で紹介する。

一体となって世界自然遺産、国立公園としての奄美大島の価値を発信



他の拠点施設やガイドツアーへ　　マングローブツアー、トレイルコースへ

56